

かっているが、役場職員自身が要望を聞いて回ることが大事であることを聞いた。

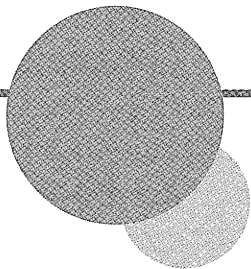
二日目は、その方の紹介で山野田集落という、山間の10件程度の集落で作業することになった。その集落の住民の一人は、ボランティアで作業してもらうのはありがたいが、何をやらしてもらえばよいのかわからない、と言っていた。しかし、私達は住民の方々から要望を聞いて周り、ダメージを負った民家からの家財道具の持ち出しの手伝いや、公民館やイベント施設の崩れ落ちた壁や、壊れた物の撤去作業を行うことになった。民家や施設は床にガラスや様々な物が散乱しており、壁が剥がれ落ちていた。もう何年も人が住んでいないような悲惨な状況であった。山野田集落の民家は古い造りであったので多くの家が被害を受けた。高齢者も多く、集落の再建は難しいのではという。

今回の中越地震のボランティア活動には不具合があったと思う。実際現地に行き、役場にボランティ

ア活動を申し出ても、ボランティアは足りてると言われた。しかし、実際には山野田集落のような人手の欲しい状況はたくさんあるだろうし、行政の情報収集不足というしかない。それだけでなく、我々大学にも問題があったであろう。事前に、現地で何が要求され、どの程度人員が必要であるのか、十分に調べてから行くべきであった。ただ行けば良いというものではない。自分達学生に現地で具体的に何ができるのか、十分に考慮すべきであった。

また、一度被災地に干渉したのであれば、継続的に現地で作業すべきであった。中越地震のボランティア活動が、1回だけで途切れてしまったことは非常に残念である。山野田集落の住民の方が言っていたように、住民の方々は途方にくれている可能性があり、時間が経てば冷静に状況を掴め、その時こそボランティアが必要だったのではと考える。

被害のでた農地の復旧は、雪の溶けた春先にある。もう一度農学部の出番である。



「7・13水害」ボランティアの参加と そのきっかけについて

自然科学研究科 修士1年 高原康人

新潟中越地方は、7月13日に水害に見舞われ、新潟大学農学部は中之島町でボランティア活動を行った。私は2回目の8月22日のボランティアへ参加した。

実際に現地へ足を運んでみると、浸水によって荒れた家屋や水に流された墓石などが見られ、水害による被害がどれだけすごいものかということがわかった。それはテレビや新聞などから得られる情報よりも、しっかりとした実感として感じられ、大きな災害の被害にあったことの無い私に、災害の恐ろしさを教えてくれた。

このような町の惨状のなかで、私たちが行った活動は農業用水の側溝さらいだった。私はてっきり町

の方で作業を行うと思っていたため、少々拍子抜けしてしまっただけで、水を含んだ土は重くこれも大変な作業であった。少人数で行っていたのでは長い時間を要しただろう。

普段、災害というと、町の方に目がいてしまいがちだが、災害による影響は農業や工業などの産業へも及ぶということに気づかされた。考えてみれば私たちは農学部であるのだから、農学部の視点から役に立てるべきなのかもしれない。今回行った活動は農学部らしい活動であったと言える。災害など起きて欲しくはないが、また再び農学部としてボランティア活動を行う際は、我々農学部からの視点で仕事を見つけることを念頭において働きたいと思う。

後日聞いた話だが、予め連絡を取らずに現地に行くことと仕事が無いそうである。おそらく現地の人たちも復興作業に追われて、こちらの指示を行う余裕がないのだろう。このような場合、仕事を役所などに一方的に求めるとかえって負担となってしまうため、自分達で行うべき仕事を探すことが重要であることがよくわかる。住民の人たちに話しを聞けば、役所単位では把握できない仕事は必ずあるだろう。

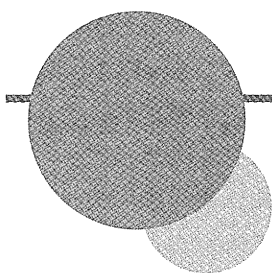
また次に、ボランティア活動へ参加するきっかけについて次のように考えた。これまで私はあまりボランティアをいうものに積極的に参加しなかった。今回参加した理由としては、同じ新潟県内の出来事であったということが挙げられる。これが全く異なる地域、遠方の地域であればおそらく参加していなかっただろう。その根底には「地域同士の助け合い」、「困ったときはお互い様」といった意識が自分の中にあっただように思え、ボランティアという活動を行ううえで、これらの意識は重要なのではないかと考えた。

なぜなら、人は身近な人、親しい人のためであるほど、無償で行動を起こす傾向が高いからだ。このような意識が地域社会の人々に育っているのなら、災害が起きた時に皆がより迅速に、自発的に活動に

移すことができるのではないだろうか。そのため、個人間の地域社会内の繋がりをどのように強めてゆくかが課題であると思う。大学はそうした意識を育てやすい機関であると思う。研究やフィールドワーク、その他様々な活動を通して、地域の活性化を促す役割をもっている。特に我々農学部は農業という1つの産業を対象とした学問であるから、地域との結びつき、協力関係は強いと言えるだろう。調査や研究の協力をしてもらうため、大学は何かしら地域社会へ貢献することが必要だと思う。ボランティア活動もその一環ではないかと感じた。

今回参加した水害ボランティア後、悪いことは重なるものなのか、10月23日に中越地方は中越地震に見舞われた。死傷者は少なかったが、水害の影響によって不自然な生活を送る被災地の方々には、更に大きなストレスとなったことだろう。水害と地震によって被害を受けた被災地の方々が、一刻も早く普通の生活に戻り安心して暮らせるようになるようお願いしている。

私は地震後のボランティア活動には残念ながら参加することはできなかったが、今後県内はもちろん県外も含め、ボランティア活動に積極的に参加しようと思う。



小国町ボランティア

農業生産科学科3年 渡辺千香

11月4日・5日にかけて小国町へボランティアに行った。「どのような活動が行えるか」ということを把握することが、大きな目的であった。これをもとにして、農学部位全体がどのような支援を行えるか計画するらしい。メンバーは伊藤先生と私を含めて8人と、少人数であった。

11月4日：第1日目

早朝に、新潟大学農学部を出発する。高速で長岡へ向かったが、途中で通行止めになっていたため、高速を降りた。長岡に行くと、道路が波打っていて、痛んでいるのがわかった。小国町到着後、役所のボランティアセンターへ行った。しかし仕事は無く、車内で待機することとなった。そこで、先生の知り合いである小嶋さんの事務所へお邪魔をして話を伺